

維新史回廊だより



第17号

平成 24 年
(2012 年)
3 月発行
年 2 回発行

◇ はじめに ◇

維新史回廊だより第一七号は、「下関戦争と長州砲」と題して、下関市立長府博物館の田中洋一学芸員の解説をお届けします。

田中学芸員は、平成二三年八月から九月にかけて、下関の歴史に所縁ある在外資料の調査として、二週間にわたりイギリス・フランス・オランダの三か国を訪問されました。今号は、そこで明らかになった、戦利品として海を渡った長州砲の詳細について解説してもらいます。

下関戦争と長州砲

◎なぜ、関門海峡で外国と戦争が行われたのでしょうか？

文久元年（一八六二）三月、萩藩は公武合体と開国の実現を目的とする「航海遠略策」を掲げ、中央政局に参入していきます。長井雅楽が提唱した同策は、懸案事項であった朝幕融和と外交問題を一挙に解決できるものとして、朝廷・幕府も興味を示し、中央政局における萩藩の立場を向上させました。

そのような中、文久二年（一八六二）四月、孝明天皇が公武合体・国内一和を優先しつつも「七八箇年及至十箇年内」の攘夷断行を示します。これは「航海遠略策」に同意ともとれますが、支持する幕閣の罷免、不敬の疑いをもった朝廷の反発が重なり、萩藩は同策の周旋を中止せざるを得なくなってしまうました。さらに、孝明天皇の思召を拡大解釈した攘夷強硬派が活動を活発化し、京都の情勢が一変したため、萩藩は諸藩に先駆けて「即今攘夷（破約攘夷）」を掲げ、全く逆の方針に舵をきったのです。

この萩藩の立言に意を通じた三條実美ら公家、桂小五郎・久坂玄瑞ら一部の萩藩士、真木和泉ら浪士など攘夷強硬派は、攘夷実行に関する考えを異に

しますが、朝議への影響力を高めていったのです。

その結果、文久三年（一八六三）四月、攘夷一色に染まる京都に入った将軍家茂が朝廷から攘夷実行に忠誠を誓うよう迫られると、幕府は攘夷期日を五月一〇日と示したのでした。

◎攘夷戦争から四国連合艦隊下関砲撃事件に至る経緯を教えてください。

文久三年五月一〇日、米国商船砲撃を皮切りに、長州は他藩に先駆けて攘夷を実行、続いて同月二三日に仏艦を、二六日に蘭艦を砲撃して撃退しました。ここまでは、攘夷の成功に沸いたと推測されますが、六月一日には米艦の報復攻撃により軍艦を失い、同月五日には仏艦と交戦して前田村を占拠され、攘夷の難しさを痛感したと推察されます。〔攘夷戦争〕

五度にわたる外国との交戦で西欧列強の軍事力を目の当たりにした長州でしたが、再び砲台を増築して関門海峡の封鎖を続け、攘夷の貫徹を目指します。その一方で、様々な思惑を秘めた英・米・仏・蘭の連合国は、下関攻撃を決めたのでした。

元治元年（一八六四）八月四日、一八隻の連合艦隊が関門海峡に姿を現わすと、その翌日から大々的な報復攻撃が始まります。連合国軍は瞬く間に長州の砲台を破壊、開戦初日にして前田砲台に上陸し、圧倒的な軍事力の差を見せつけ、長州勢を沈黙させました。開戦四日目の八月八日、萩藩は講和使



馬関戦争図(下関市立長府博物館蔵)

編集 維新史回廊構想推進協議会
発行 山口県環境生活部文化振興課

(山口市滝町一―一 TEL 〇八三一九三三―二六二七)

節をユーリアラス号【Euryalus】に派遣して休戦を申し入れ、戦闘が終結することとなったのです。「四国連合艦隊下関砲撃事件・馬関戦争・下関戦争」

◎四国連合艦隊下関砲撃事件であまり知られていない戦いがありますか？

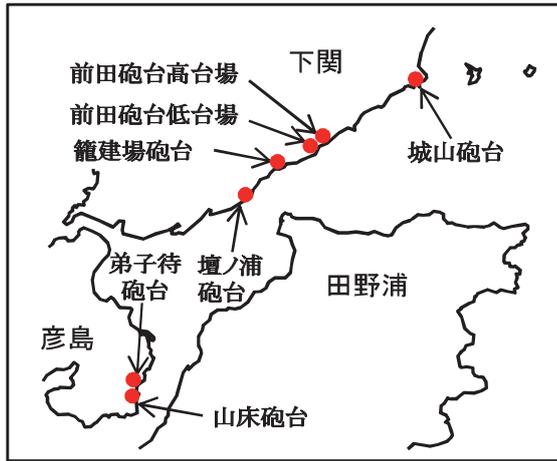
四国連合艦隊砲撃事件における長州勢の戦いについてはあまり知られていません。開戦二日目の八月六日、壇ノ浦砲台の守備を任されていた奇兵隊・鷹懲隊が、上陸した連合国軍の攻撃に一時

退却を余儀なくされ、前田砲台の応援に向かうと、阿弥陀寺及び壇ノ浦周辺で攻撃に備えていた長府藩兵は、敵兵を挟撃、艦船まで追い払うことに成功します。この勝利は長州側の唯一の勝利であったといえるでしょう。

そのほか、長門一宮の住吉神社大宮司山田撰津が長府藩領内の宮司で編制した神祇隊、安楽寺住職が真宗僧侶で編制した輜兵隊が前田砲台で奮戦するなど、自領防衛の至情に駆られた町人・農民らが力闘しています。

逆に、赤間関防衛の加勢に來た萩藩兵には、消極的な態度が多く見受けられました。本格的な艦砲射撃が始まった八月六日、大砲の轟音に肝を冷やした赤間関総奉行内藤佐渡率いる一隊が大砲・兵糧を捨てて内陸の椋野まで退却すると、萩野隊が彦島の山床・弟子待砲台を放棄、さらに外国兵が上陸した前田砲台でも益田豊前の一隊が敵前逃亡しています。

また、阿弥陀寺町に出張していた岩国領の森脇主税が率いる一隊も、砲音に恐れをなして戦場を放棄し、長府の関門で通過を拒否されると、わざわざ藩主命の偽書を作成してまで、岩国に引き返そうとしました。



砲台配置図

◎戦争に勝利した連合国が持ち帰った長州砲の行方は？

戦後、六二門の大砲を接収した英・米・仏・蘭の四ヶ国は、八月二〇日（旧曆九月二〇日）に英二六門・仏一四門・蘭一三門・米一門の大砲を分配し、（表1参照）、残りの八門は海中に投棄されたり、破壊されたものと推定されます。以上のことから、参加した軍艦数・銃砲数などを考慮して配分されたと考えられ、これを裏付けるかのように、下関戦争に参加した蘭艦『メデューサ号【Medusa】』の航海日誌には「敵から分捕った大小六二門の砲は各国で分けた。その半分を英国が取り、後の半分は仏国・蘭国で分け、米国が一番上等なものを一門取った」と記されています。

表1 接収大砲の分配表

番号	種類	接収した軍艦名	国名	大砲種別	口径 (mm)	口径 (in)	重量 (kg)	重量 (lb)	備考
1	1	Euryalus	英	青銅砲	249.3	9.8	24.9	55	
2	2	Euryalus	英	青銅砲	249.3	9.8	24.9	55	
9	17	Tartar	英	青銅砲	165.1	6.5	8.9	19	前田砲台(町可重蔵) 砲撃手立の砲撃的破壊
4	18	Tartar	英	青銅砲	165.1	6.5	8.9	19	
5	19	Tartar	英	青銅砲	165.1	6.5	8.9	19	
6	20	Tartar	英	青銅砲	165.1	6.5	8.9	19	
7	21	Semiramis	英	青銅砲	340.4	13.4	37.4	83	
8	22	D'Ambr	英	青銅砲	167.0	6.6	15.2	34	
9	29	D'Ambr	英	青銅砲	198.1	7.8	8.9	19	前田砲台(町可重蔵) 砲撃手立の砲撃的破壊
10	30	D'Ambr	英	青銅砲	167.0	6.6	15.2	34	
11	31	Contarone	英	青銅砲	320.0	12.6	32.4	72	
12	32	Contarone	英	青銅砲	320.0	12.6	32.4	72	
13	33	Barrasa	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
14	34	Barrasa	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
15	35	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
16	36	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
17	37	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
18	38	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
19	39	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
20	40	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
21	41	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
22	42	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
23	43	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
24	44	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
25	45	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
26	46	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
27	47	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
28	48	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
29	49	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
30	50	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
31	51	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
32	52	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
33	53	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
34	54	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
35	55	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
36	56	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
37	57	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
38	58	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
39	59	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
40	60	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
41	61	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
42	62	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
43	63	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
44	64	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
45	65	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
46	66	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
47	67	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
48	68	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
49	69	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
50	70	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
51	71	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
52	72	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
53	73	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
54	74	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
55	75	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
56	76	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
57	77	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
58	78	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
59	79	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
60	80	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
61	81	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
62	82	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
63	83	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
64	84	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
65	85	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
66	86	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
67	87	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
68	88	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
69	89	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
70	90	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
71	91	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
72	92	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
73	93	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
74	94	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
75	95	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
76	96	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
77	97	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
78	98	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
79	99	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
80	100	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
81	101	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
82	102	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
83	103	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
84	104	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
85	105	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
86	106	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
87	107	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
88	108	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
89	109	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
90	110	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
91	111	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
92	112	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
93	113	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
94	114	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
95	115	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
96	116	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
97	117	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
98	118	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
99	119	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	
100	120	Argus	英	青銅砲	297.1	11.7	29.9	66	

PRO ADM125 118(Return of the distribution of Guns captured from the Japanese Batteries)
「日本の砲台から接収した大砲の分配報告」(資料AD125/118 英国公文書館蔵)を元に作成

なお、アーネスト・サトウ【Sir Ernest Mason Satow】は「日本人は、上陸したわれわれにたいして非常に親切であり、じつさに自分たちが大砲をこびおろし、われわれに引き渡してくれた」と記しており、下関の人々が連合国の大砲接収を手伝っていることがわかります。一般人にとつて生活を脅かす戦争の早期終結を願うのは、今も昔も同じであり、このような行為に現れたのではないのでしょうか。

「下関市立長府博物館にある長州砲」

下関市立長府博物館で展示されている萩野流一貫目青銅砲は、フランスのアンヴァリッド軍事博物館【Musée de l'Armée】から貸与されているもので、萩藩の鋳物師 郡司喜平治が天保一五年（一八四四）に鋳造したものです。

この一貫目青銅砲は、砲耳に「15」が刻まれており、仏艦デュプレクス号【Duplex】により持ち帰られたものと推定されます（表1参照）。

ちなみに、この青銅砲には弾痕が見られないので、未使用であると言われています。前述のとおり、弟子待砲台を任されていた萩藩の萩野隊は、開戦二日目にして逃げ出しているのです、その可能性も否定できません。

「フランス・パリにある長州砲」

パリ中心部に所在するアンヴァリッド軍事博物館には、現在二門の長州砲が保管されていました（一門は、前述のとおり長府博物館に貸与中）。それぞれ「嘉永七歳次甲寅季春 於江都葛飾別墅鑄之」、萩毛利家紋「一文字三星」が刻まれ、嘉永七年（一八五四）江戸葛飾砂村の萩藩別邸において、萩藩の鋳物師 郡司喜平治が鋳造指導した大砲の一部であると考えられます。また、今まで「二門とも「一八封度砲」とされてきましたが、この度の調査で「一八封度砲」と「二四封度砲」であることが再確認できました。



24封度(斤)青銅砲
(アンヴァリッド軍事博物館)

では、二門の長州砲は、どこの砲台に設置されていたのでしょうか。イラストレイテッド・ロンドン・ニュース【The Illustrated London News】（一八六四年一月二四日付）の記事中には、「フランス軍艦セミラミス号【Semiramis】の部隊により占拠された砲台に設置された低地砲台（前田砲台低台場）の大砲は、江戸で鋳造された日本製である」と記されています。

また、アーネスト・サトウは「第七砲台」（籠建場砲台）に設置された大砲について「砲身は青銅製で、ひじょうに長く、二十四ポンドの記号がついていた」「これらの大砲には一八五四年に相当する日本の年号が刻まれていた」

と記しています。両者の記述に加え、両砲台の上陸作戦における主力部隊が、フランス軍であったことから、二門の長州砲が設置されていた砲台は、前田砲台の低台場、もしくは籠建場砲台であったと考えられます。

なお、「二四封度砲」の砲耳には「9」が刻印されており、接収大砲の分配表（表1）から、フランス軍艦セミラミス号により持ち帰られたものであると推定されます。※「一八封度砲」は磨滅して判読できませんでした。

「イギリス・ロンドンにある長州砲」

ロンドン市内に所在する英国王立大砲博物館【Fire Power Royal Artillery Museum】には、二門の長州砲が保管されていました。内訳は、天保一五年製の和式大砲で、郡司喜平治作（平成二〇年、萩に一時里帰りしたもの）が一門、郡司富蔵作が一門であり、富蔵作には雲竜紋が彫られており、長府博物館の萩野流一貫目青銅砲を髣髴とさせます。

両砲とも一貫目の砲弾が用いられた青銅砲と類推され、『元治甲子前田壇浦始め各台場手配のこと』には、彦島の「宮の原台場」に「一貫目筒五挺」を設置されたことが記されています。

ところが、一連の戦闘に参加していない宮の原砲台より大砲を接収した記録はないため、宮の原砲台から「一貫目筒」が別の砲台に移設されたと考えられます。事実、宮の原砲台を守備していた長府藩家老の迫田刑部は、開戦二日目に萩野隊が放棄した弟子待・山床台場守備をも任されており、宮の原砲台から補充された可能性は十分にあります。

また、喜平治作の砲耳に「29」、富蔵作の砲耳に「XVII」（17）と刻まれており、彦島の大砲撤去を行った英艦ターター号・蘭艦ジャンピ号により接収されたものと推定されることから（表1参照）、弟子待・山床砲台に設置されていたと考えられます。



郡司富蔵作 一貫目青銅砲
(英国王立大砲博物館)

「オランダ デン・ヘルダーにある長州砲」

オランダの北ホラント州にある軍港都市デン・ヘルダーの海軍博物館【Marine Museum Den Helder】には、「下関コーナー」が設置され、下関戦争がオランダ海軍史における重要な事件・事象であったことを紹介しています。

「下関コーナー」の中心に、目指す長州砲が展示されており、砲身が真鍮（黄銅）製と見受けられる野戦砲は、ドイツのクルップ社【Krupp】製と推定され、砲架のみ長州で作されたものと紹介されていました。

ただし、デン・ヘルダーの大砲は、長州製の可能性も否定できません。外国製の砲には付属しない「元目当」「先目当」が付属しており、日本製であることを裏付けています。

また、クルップ社は、一八五一年に開催された第一回ロンドン万国博覧会に鋼鉄製の野戦砲を出品し、既に銅製から鋼鉄製の砲製作にシフトしていたこともあり、疑問が生じます。



野戦砲(デン・ヘルダー海軍博物館)

なお、大砲の砲耳には「26」と刻まれていることから、蘭艦アムステルダム号【Amsterdam】によって接收されたものと推定されます(表1参照)。『メデューサ号の航海日誌』によると、アムステルダム号は「長府砲台」(城山砲台)に設置された大砲を撤去しており、アーネスト・サトウは「串崎岬へ航行したが、そこには三門の真鍮砲と四門の木製砲が置いてあった」と記しています。さらには、ヘンリー・レイ陸軍工兵少尉【Henry Wray Captain R.E.and Major】の報告書に、「第一砲台【Battery I】」(城山砲台)から一二ポンド野戦砲を接收した記録があることから、デン・ヘルダーの大砲は城山砲台に設置されていたと推定されます。

「オランダ・アムステルダムにある長州砲」

オランダの首都アムステルダムの中心部にあるアムステルダム国立博物館

【RIJKS MUSEUM amsterdam】には、攘夷戦争・四国連合艦隊下関砲撃事件に関する複数の資料が所蔵されています。

資料の大部分は、蓋表に「SHIMONOSEKI」、蓋裏に「一八六五年二月、蘭艦メデューサ号の艦長カセンブロート【J.W. de Casembroot】が、デン・ハーグ【Den Haag】市民に提供した賞賛の記録」と記された木箱に保管されていたようです。主な資料は、第三次攘夷戦争で活躍したメデューサ号乗組員に対して、オランダ国王が賞与したメダル・褒状など、まさに「賞賛の記録」に値するものでした。

これら資料とは別に一際目立っていたのが、長府毛利家の家紋が銀の象嵌(ぞうかん)であしらわれた砲身を輪切りにした大砲です。長府藩では、安尾家などの铸物師が大砲を铸造していたことがわかっていますが、残念ながら大砲を製作した時期・製作者を推測する資料はありませんでした。



長府砲(アムステルダム国立博物館)

◎そのほかに、長州砲は残っていますか？

現在、アメリカ・ワシントンにある海兵隊資料館【Marine Corps Museum】にある長州砲が残っている以外、所在が不明です。多くが錆びつぎ、姿を変えてしまっているのですが、近い将来、幻の長州砲が発見されることを期待してやみません。

〈あとがき〉

下関市立長府博物館では、常設企画展「幕末長州馬関戦争」を平成24年5月6日まで開催中ですので、ぜひ同館に足を運んでみてください。

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。バックナンバーは、維新史回廊ホームページ <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/shin/index.html> で御覧いただけます。次号発行は今年6月の予定です。お楽しみ。